

本サイトへの記事転載につきましては、化学工業日報社より許諾を受けております。

新型コロナウイルス感染症拡大防止に貢献するため、グループの総力を結集し対策製品を相次ぎ開発・投入している三菱ケミカル。しかし一大ユーザーである自動車産業の低迷などが影響し、足元の業績は芳しくない。当面続くコロナとの共生期間に何を革新し、中長期にどう成長を遂げようとしているのか。和賀昌之社長に聞いた。

◆：コロナ対策製品の開発・投入が相次いでいます。

「飛沫防止のアクリル板、マスク、医療用ガウン、防護服などはすべて化学品。化学産業の裾野の広さに対する社会認知が深まっている。テレワーク期間中、全役員に『さらに貢献できることはないか』と聞くと、さまざまなアイデアが集まったので実行に移している。たとえば、体温で変形し体にフィットするマスクを提案したところ、ある役員がスケッチし、それをベースに3Dプリンターですぐに試作した。役員同士でワイワイガヤガヤし、即座に動くなど以前より機動力が上がった」

◆：コロナ以前から工場自動化やテレワークを提唱しています。

「プラントのデジタル化やロボティクス化などにもっと早くから取り組んでいればよかったが、方向性は間違っていないと確信した。モノづくりに必要なという考えを

## 三菱ケミカル

### 和賀 昌之社長に聞く



# 新たな社会 決め手は化学

変える必要がある。テレワークについても都市圏の従業員は定着しつつある。課題はあるが、インフラが整えば十分できることが証明された」

◆：コロナの見極め重要に

「足元の業績は、極めて素材メーカーらしい業績で、川下の産業ごとに跛行性がある。半導体やディスプレイはそれほど悪くなく、巣ごもり需要の包装材料、問仕切りのアクリル板なども伸びている。一方でポリウームの大きい自動車や航空機向けは軒並み打たれ、トータルで『負け』

か。PCR検査を簡便にして罹患者を隔離するのが有効で、1〜2年めどが立つ可能性もある」

◆：三菱ケミカルHDは来年度からの次中期経営計画を策定中です。コロナによる戦略変更は。

「足元がこのような状況のなか、将来を語ってを推進する方向だ」

◆：成長の軸足は。

「1つは半導体。電気ですべてが動く世界がまもなく到来する。その世界では、抵抗や熱との勝負になり、材料が決め手になる。今からシリコンウエハーに進出する考えはないが、部品の精密洗浄サービス、高純度薬品、合成石英、買収した米社の無機・有機技術など関連分野を厚くしている。窒化ガリウム（GaN）も将来が楽しみだ。自動車も通信技術やセンサーが進化すればぶつかわらなくなり、車体は鉄でなくともよくなる。超軽量化が実現すればエネルギー消費の大幅低減などにつながる。そうした可能性を広げるのが化学だ」

◆：水素や人工光合成について。

「化学の歴史は自然の模倣だ。300年前に産業革命が起こった時、人類は植物をまねして人工光合成の開発を進めるべきだった。CO<sub>2</sub>を排出させず、利用する社会の実現に貢献したい。それには水素をいかに効率よく作るか。人類はまだ成し得ていないが、水素さえあればオレフィンも作ることができ、循環経済につながる」

◆：人工光合成以外に環境問題解決への貢献

「植物由来で生分解性も有するバイオPBS（ポリブチレンサクシネート）の認知が広がっている。あとはケミカルリサイクルだ。4月にサーキュラーエコノミー推進部を設置し、20人強が取り組んでいる。さまざまな種類のプラスチックをどうモノマーまで戻すか、ヒントをつかんでいく。まだビジネスとして成立しないのが実情だが、われわれは逃げるわけにはいかない。使う側とリサイクルする側が歩み寄らないと進まないが、優れた技術があれば自治体など皆振り向いてくれるはずだ。そうした信念のもと取り組みを加速する」

（渡邊康広）

「極めて素材メーカーらしい業績で、川下の産業ごとに跛行性がある。半導体やディスプレイはそれほど悪くなく、巣ごもり需要の包装材料、問仕切りのアクリル板なども伸びている。一方でポリウームの大きい自動車や航空機向けは軒並み打たれ、トータルで『負け』

か。PCR検査を簡便にして罹患者を隔離するのが有効で、1〜2年めどが立つ可能性もある」

◆：三菱ケミカルHDは来年度からの次中期経営計画を策定中です。コロナによる戦略変更は。

「足元がこのような状況のなか、将来を語ってを推進する方向だ」

◆：成長の軸足は。

「1つは半導体。電気ですべてが動く世界がまもなく到来する。その世界では、抵抗や熱との勝負になり、材料が決め手になる。今からシリコンウエハーに進出する考えはないが、部品の精密洗浄サービス、高純度薬品、合成石英、買収した米社の無機・有機技術など関連分野を厚くしている。窒化ガリウム（GaN）も将来が楽しみだ。自動車も通信技術やセンサーが進化すればぶつかわらなくなり、車体は鉄でなくともよくなる。超軽量化が実現すればエネルギー消費の大幅低減などにつながる。そうした可能性を広げるのが化学だ」

◆：水素や人工光合成について。

「化学の歴史は自然の模倣だ。300年前に産業革命が起こった時、人類は植物をまねして人工光合成の開発を進めるべきだった。CO<sub>2</sub>を排出させず、利用する社会の実現に貢献したい。それには水素をいかに効率よく作るか。人類はまだ成し得ていないが、水素さえあればオレフィンも作ることができ、循環経済につながる」

◆：人工光合成以外に環境問題解決への貢献

「植物由来で生分解性も有するバイオPBS（ポリブチレンサクシネート）の認知が広がっている。あとはケミカルリサイクルだ。4月にサーキュラーエコノミー推進部を設置し、20人強が取り組んでいる。さまざまな種類のプラスチックをどうモノマーまで戻すか、ヒントをつかんでいく。まだビジネスとして成立しないのが実情だが、われわれは逃げるわけにはいかない。使う側とリサイクルする側が歩み寄らないと進まないが、優れた技術があれば自治体など皆振り向いてくれるはずだ。そうした信念のもと取り組みを加速する」

（渡邊康広）